

## 第4章 高岡市の歴史文化の特徴

第1章において本市の自然的・地理的環境や歴史的背景を、第3章ではそれらの環境を受けて受け継がれてきた文化財の現状について概観した。歴史文化基本構想での整理を基に、12年の間に調査等によって明らかとなった情報や視点、文化財の状況の変化等を反映し、歴史と文化財の相関図を作成した（資料編参照）。これを基に高岡の歴史や風土を物語る固有のキーワード＝“高岡らしさ”として本市の歴史文化の特徴を以下の6つに整理した。

### ① 豊かな水の恵みによる人々の営み ～西山丘陵・小矢部川・庄川扇状地～

西山丘陵が連なる小矢部川左岸は、古墳が集中するなど早くから人口集積が進んだ地域であった。右岸は庄川扇状地の湧水帯によって、古くから稲作が行われ、近世に形成された散村の風景が現在も残される。

### ② 陸・川・海でつなぐ人とモノの交流 ～北陸道・北前船・鉄道～

小矢部川の舟運や伏木の港津機能は、古代より重要な交通機能として利用されてきた。加越能3国の要として築かれた高岡は、物流・経済の中心として発展し、近代には県内初の鉄道を敷設するなど時代を通じて交通の要衝になっている。

### ③ 大伴家持が愛した越中の風土 ～越中国府と万葉集～

伏木台地は、北陸最古級の寺院である御亭角廢寺をはじめ、越中国府の国庁や国分寺が置かれたほか、国守として赴任した大伴家持が数々の歌を詠むなど、古代から越中の政治・文化の中心となっていた。

### ④ 土地や人に根ざした信仰 ～祭礼行事と大寺院～

古代の土地に根ざした信仰、中世に広まった多様な仏教信仰は、高岡における文化財の形成の歴史を語る上で重要である。また、信仰と深く結びついている祭礼行事は、高岡独自の歴史的風致を形成している。

### ⑤ バイタリティ溢れる町民のまち ～職人と商人のまちへ～

高岡中心市街地は、加賀前田家2代当主・前田利長により近世初期に形成された高岡城下町を礎としている。城下町は商工業の町へと転換され、「加賀百万石の台所」として、藩を支えた。

### ⑥ 受け継がれるものづくりの精神 ～伝統と挑戦～

近世以降、商工業都市として発展する中で銅器や漆器などの伝統工芸と技術が発展した。伝統技術を守りつつ時代に応じたものづくりに挑み続ける精神は、現在も息づいている。

## ① 豊かな水の恵みによる人々の営み ～西山丘陵・小矢部川・庄川扇状地～

西山丘陵と並行する小矢部川左岸流域の一带は、庄川の氾濫による水害が比較的少なく安定した地域であり、早くから人口集積が進んだ成熟した地域であった。一方、小矢部川右岸は、氾濫を重ね頻りに河道が変わることで形成された庄川扇状地で、その扇端には湧水帯と自噴井帯が広がっている。このため、古くから稲作が行われた。近世には改作法によって新田開発が図られ、藩の財政を支える穀倉地帯となった。市南部には、水が豊富で農業経営効率を高めるために形成された散村の風景が今も残されている。



西山丘陵

## ② 陸・川・海でつなぐ人とモノの交流 ～北陸道・北前船・鉄道～

小矢部川左岸の西山丘陵を走る山根道は、古代から近世初期まで越中を東西に横断する幹線道路であった。現在の市中心部は、近世初めに前田利長が、加賀・越中・能登3国の要に位置する地に高岡城を築いたことが始まりである。近世から明治・大正にかけて物資の集散地として中心的な役割を果たしてきた。明治時代には、県内初そして日本海側最初の民営鉄道が開業している。

また、海の交流は古く、桜谷古墳からは百済の影響を受けたと考えられる出土品も発見されている。砺波平野の米は川舟で庄川・小矢部川筋を通して河口の伏木に運ばれ、海から都へ運ばれた。また、近世の伏木は北前船や地回りの廻船などによって、加賀藩随一の商品物資が出入する湊としてにぎわった。維新後は積極的に港の近代化が進められ、現在に至るまで、日本海の玄関口として流通・交易の拠点機能を担っている。現代でも高岡駅を中心に万葉線やJR城端・氷見線やバス路線などが放射線状に広がっているほか、北陸新幹線新高岡駅が設置されるなど富山県西部の交通の要衝となっている。



伏木港

## ③ 大伴家持が愛した越中の風土 ～越中国府と万葉集～

伏木は古代の越中国府が置かれ、国庁や国分寺が置かれたほか、国守として赴任した大伴家持が数々の歌を詠むなど、古代から越中の政治・文化の中心であった。万葉集4516首のうち、大伴家持が越中に赴任した5年間に詠まれた歌を中心にした337首は、「越中万葉」と呼ばれ、歌の題詞に施設の名称や人物の名が残るなど当時の越中国府の様子を知る貴重な歴史資料ともなっている。また、今でも海越しの立山連峰やアシツキなど大伴家持が詠んだ景色を見ることができ、往時をしのばせる。



大伴家持像

#### ④ 土地や人に根ざした信仰 ～祭礼行事と大寺院～

二上山麓やそれに連なる西山丘陵沿いには、二上射水神社、氣多神社のほか複数の延喜式内社が鎮座している。中世より広まった多様な仏教もまた、国泰寺をはじめ二上山麓や西山丘陵沿いに寺院が建立され、その地域の人々に長く受け継がれた信仰の場となっている。これらの社寺には、彫刻、絵画などのほか、祭礼行事等優れた文化資産が多く残されている。

近世には、瑞龍寺や勝興寺に見られるように加賀前田家や本願寺などによる大規模な伽藍整備が行われる一方で、経済力を増した民衆の寄進により寺社の造営がなされた。また、信仰と深く結びついている祭礼行事は、民衆の生活と密接に結びついて多彩な変容や広がりを見せ、現在も集落など様々な規模のコミュニティで執り行われている。



伏木神社春季例大祭の祭礼行事

#### ⑤ バイタリティ溢れる町民のまち ～職人と商人のまちへ～

一国一城令による廃城後、高岡は、加賀前田家3代当主利常によって商工業都市として生まれ変わった。経済的立地条件に恵まれ、加賀藩の保護を受けた高岡の商人は、問屋業を軸に発展し、加越能3国全域の商業流通の一翼を担い、藩を支えた。また、商人や医者が俳諧や茶など文化の華を咲かせた。

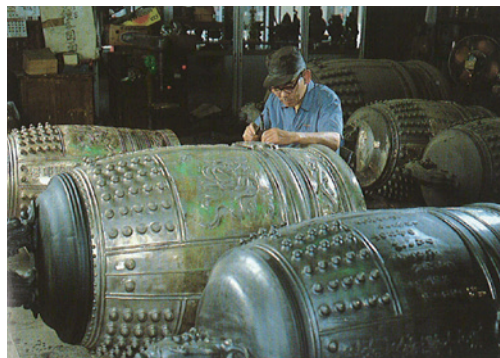
明治維新によって藩の制約から解放された高岡の商人は、近世に蓄えた資本を港湾や鉄道などのインフラに投資し、日本海側でもいち早く近代化に努め、国家総動員体制によって産業再編成が強行されるまで常に県下の産業経済の中心にあり続けた。



旧高岡共立銀行

#### ⑥ 受け継がれるものづくりの精神 ～伝統と挑戦～

市内では、弥生時代の管玉工房や中世には宇多派の刀工が活躍するなど、古くから優れたものづくりが行われていた。高岡城の廃城後、前田利常によって藩内きっての経済都市に成長した高岡町は、藩から特権と統制を受け、鋳物や染物業も盛んな職人の町であった。消費者層の武士が金沢に引揚げたため、高岡の職人と商人は、協力して町人や農民向けに商品開発を進めて勢力を拡大し、銅器や漆器は商業的な工芸品として発展していった。さらに鋳物技術と富山の水力発電による電力を活かしたアルミニウム産業は、高岡の主要な産業となった。伝統技術を守りつつ時代に応じたものづくりに挑み続ける精神は、現在も息づいている。伝統工芸技術の継承に留まらず、化学技術の応用や伝統産業同士の交流などによって錫を活かした食器や銅器着色技術を活かした服飾など高岡のものづくりは幅広い分野で活躍している。



高岡銅器